

御三家分家の創出について(概略版) 水戸家分家を中心として

茨城県立歴史館学芸部学芸第二室

首席研究員 永井 博

はじめに

「常識」の再検討 視点を変えた検討の必要性

これまでの「御連枝」研究

「結果」の単なる説明

- ・「尾張家には二代光友の二男義昌のたてた松平出雲守家，三男義行の美濃高須松平撰津守家，十一男友著の松平但馬守家があったが，ほとんど中絶して高須家を残すのみとなった。紀伊家は頼宣の子頼純を祖とする伊予西条の松平左京大夫家一家だけである。連枝の数では三家のうち水戸家がかつとも多かった」(『茨城県史』近世編)

藩政のあり方

- ・「藩政は宗家から派遣された“御附家老”が掌握し，宗家からの“御合力金”が...極めて重要な財政的基盤となっていた」「藩主自身も，家臣と領民に責任をもつ“領主”としてよりも“水戸家公族”としての自覚が強かったように思える」(桜井明「〔府中松平藩〕覚書(上)」)
- ・「その藩政は政治的のみならず経済的にも水戸藩の影響を強く受けつつ藩政は展開」(大河峯夫「守山藩成立の事情について」)
- ・「江戸においては御附家老，松川陣屋においては御附奉行と，江戸と在地の両政治機関の実質的な権限を水戸藩から派遣された家臣によって握られていた」(根本俊「水戸藩御連枝の支配機構 守山藩常陸領を中心に」)

創出目的

- ・「幕府の御三家水戸藩に対する支援策」(前掲大河論文)
- ・「徳川一門領の拡大による幕藩領国体制の基盤強化と御三家存続の円滑化」(白根孝胤「御三家の官位叙任と幕藩権力 尾張家を中心に」)

幕藩体制下における徳川一門の分家創設について，その過程，意義についての検討は不十分な状態
水戸徳川家の「連枝」についても，この視点からの検討が必要。

大名家の相続の変化について，武家諸法度等の規定の運用を踏まえた検討の必要性

将軍対大名の「個人的な主従関係」から将軍家対大名家の「家と家との主従関係」への変化。

1.水戸家における分家創出

(1) 頼房の庶子処遇

高松松平家の場合

その他の庶子の処遇

これまでの研究の問題点

- ・頼元，頼隆兄弟が内分大名として取り立てられるまでの経緯が明らかにされていない。
- ・8男頼泰，9男頼以の処遇が不明。

(2) 頼元・頼隆の大名化過程

頼元，頼隆...寛永6年生(光圀の1歳年下)

寛永20年(1643)

ともに頼房と光圀に伴われ、初御目見。

正保2年(1645)正月

ともに年頭登城。

正保3年(1646)12月晦日

ともに従四位下侍従に叙任。

寛文元年(1661)9月26日

ともに2万石分知...水戸家の2万5000石要望に対し、幕府は2万石で承認
御三家分家の先例となることを配慮か？

(3) 頼雄の大名取立

天和元年(1681)8月13日

綱吉より取り立ての命

天和2年2月10日

穴戸1万石

天和2年12月27日

従五位下為大炊頭叙任

綱吉...天和元年6月に「越後騒動」(高田松平家の御家騒動)を親裁 綱吉初政の一門対策の一環。

この時点で先の頼利以下の兄弟のうち、頼利、頼以、重義は死去、頼泰は隠居、房時は翌年に死去。
・阿部正武の口上には「本宗連枝蔓延」とあり、「連枝」からは外れることが示唆。

「譜代之列」に加えられたという記述はないものの、事実上そのように遇された。

正徳元年(1711)8月21日

松平頼道、頼慶父子を譜代とする

2. 御三家分家の創出

(1) 分家の種別

内分分家...宝永までは外様と家門(尾張・水戸・福井・松江)のみ

別朱印分家(本家領知を分地する)...元禄7年が最後の事例(御三家分家は新知)

(2) 御三家分家の創出過程

尾張家 美濃高須藩(四谷家)

明暦2年(1656)松平義行(光友2男・実3男)出生(母正室千代姫)

寛文5年(1665)家綱に初御目見

寛文6年(1666)従四位下少将叙任

寛文10年(1670)屋敷地拝領

天和元年(1681)信濃高井新知3万石

元禄13年(1700)高須移封

陸奥梁川藩(大久保家)

慶安4年(1651)松平義昌(光友3男・実長男)出生(母側室)実長男

寛文5年(1665)家綱に初御目見

寛文6年(1666)従四位下少将叙任

天和3年(1683)陸奥梁川新知3万石

3代藩主義真死去(享保14年)で絶える

川田久保家 延宝6年(1678)松平友著(光友6男)出生

元禄7年(1694) 綱吉に初御目見 従五位下叙任
正徳元年(1711) 譜代大名之列
享保3年(1718) 従四位下叙任

2代友淳が高須家相続(享保17年)で絶える

通春(綱誠14男)元禄9年(1696)出生

享保元年(1716) 家継に初御目見 譜代大名之列 従五位下叙任
享保14年(1729) 陸奥梁川新知3万石 表向之席
享保15年(1730) 本家相続で絶える

紀伊家 伊予西条藩 寛永18年(1641) 松平頼純(頼宣2男)出生

正保2年(1645) 家光に初御目見

承応3年(1654) 従四位下少将叙任

寛文8年(1668) 紀伊分知5万石, 屋敷地拝領

寛文10年(1670) 伊予西条新知3万石(紀伊3万石返還2万石受領)

越前高森藩 延宝8年(1680) 松平頼職(光貞2男)出生

元禄9年(1696) 綱吉に初御目見 従四位下少将叙任

元禄10年(1697) 越前高森新知3万石

宝永2年(1705) 本家相続により絶える

越前^{かづらの}葛野藩 貞享元年(1684) 松平頼方(光貞3男=吉宗)出生

元禄9年(1696) 綱吉に初御目見 従四位下少将叙任

元禄10年(1697) 越前葛野新知3万石 宝永2年本家相続により絶える

実子もしくは「同姓内」で養子をとることができなければ断絶という扱い。なお、「同姓」とは「本家を同一にする末家(分家)相互, 及び其一より他の家の分家を指した称呼」(中田薫「徳川時代の親族法相続法雑考」)とされる。これは將軍家の分家たる館林(綱吉), 甲府(綱重-綱豊)の扱いと同様。

(3) 江戸城中の殿席による分家の三分類

溜間詰 高松

帝鑑間詰 川田久保・宍戸

大広間席 高須・梁川・西条・(高森・葛野)・守山・府中

大名としての性格の相違 「大広間席」の分家が, 本来的な意味における御三家分家。

水戸藩の特異性 「連枝」として高松が深く相続, 政治向きに関与。

(4) 御三家分家創出の画期

【第1期】寛文~天和期(家綱および綱吉初期)(松平義行, 義昌, 頼純, 頼元, 頼隆)

【第2期】元禄10~13年(綱吉晩期)(松平頼職, 頼方, 頼貞, 頼隆)

御三家官位の極官が定まる。紀伊家と水戸家の分家創出も綱吉の御三家家格確定政策の延長。

「御成」という政治的なパフォーマンスを伴って効果的に演出された。

水戸家...綱吉と対立した光圀が隠退して10年という節目 あえて新知として与えていること, 水戸邸への初めての「御成」であったこと 政治的な意味が大きい。

【第3期】正徳元年(家宣)(松平友著, 頼道, 頼慶)

家門ではなく譜代大名としての取立である(「譜代分家」とする)。

むすび

幕府の方針

・血統維持 「世子+二人の控え」の原則 それ以外は譜代もしくは家臣等の養子

・庶子の ” 適切な ” 処遇。

綱吉の一門統制策 将軍家の絶対的優位性

「家」としての確立 当初は、実子もしくは「同姓内」で養子候補がいなければ断絶。

【参考文献】(順不同)

- ・松平秀治「大名分家の基礎的考察 - 内分家を中心に - 」
『徳川林政史研究所研究紀要』昭和 47 年度 1973
- ・『大洗町史資料集 第 2 集 守山藩資料(上) 』 1981
- ・桜井明「〔府中松平藩〕覚書(上)」『茨城県立歴史館報』2 1 1994
- ・根本俊「水戸藩御連枝の支配機構 守山藩常陸領を中心に 」
大石学編『近世国家の権力構造 政治・支配・行政 』岩田書院 2003
- ・大河峯夫「守山藩成立の事情について」『郡山地方史研究』3 3 2003
- ・白根孝胤「御三家の官位叙任と幕藩権力 尾張家を中心に 」
『徳川林政史研究所研究紀要』3 9 2005
- ・大森映子『お家相続 大名家の苦闘 』角川書店 2004
- ・林董一「支藩考 - 美濃高須藩の場合 - 」 『史学雑誌』7 1 卷 1 1 号 1962
- ・御厨義道「高松松平家の成立と徳川御三家」『徳川御三家展』展示図録 香川県歴史博物館 2000
- ・「三浦市右衛門覚書」『新編香川叢書 史料編(一)』 香川県教育委員会 1979
- ・『茨城県史料 近世政治編 』茨城県 1970
- ・名越時正『新版 水戸光圀』錦正社 1968
- ・『水戸義公伝記逸話集』吉川弘文館 1978
- ・『源流綜貫抄』(茨城高校蔵・茨城県立歴史館保管)
- ・『徳川諸家系譜 第三』続群書類従完成会 1979
- ・『和歌山県史 近世』和歌山県 1990
- ・中田薫「徳川時代の親族法相続法雑考」『法制史論集 第一巻』岩波書店 1926
- ・橋本正宣「近世の武家官位」同編『近世武家官位の研究』続群書類従完成会 1999
- ・『国史大系徳川実紀 第六篇』吉川弘文館 1965
- ・『国史大系徳川実紀 第七篇』吉川弘文館 1965
- ・藤野保『近世国家史の研究』吉川弘文館 2002
- ・『御触書寛保集成』岩波書店 1934
- ・拙稿「〔御三家〕の家格形成過程 - 官位を中心に - 」『茨城県立歴史館報』2 9 2002
- ・拙稿「〔御使〕と官位叙任 - 高松松平家の家格をめぐって - 」『社会文化史学』4 5 2003

© Hiroshi.Nagai